# 古代建築における殿堂形式と庁堂形式

## はじめに

北宋の将作小監、季誠（明仲）によって西暦1100年に編纂された建築技術書『営造法式』によると中国の建築には「殿堂」と「庁堂」の二種類の形式があるとし、それぞれ数棟づつの図面を掲載している（図1にその一部を掲載）。殿堂形式は格の高い建物に、庁堂形式はその他の建物に使用されるという。

源流を大陸に持つわが国の古代の宮殿・寺院建築においても殿堂形式、庁堂形式、あるいはそれに準ずる構造形式があったことは十分考えられ、これを検証することは意義深い。本稿では、わが国の平安時代以前の現存遺構を資料として考察する。

## 既往の研究

『日本建築史基礎資料集成　仏堂Ⅰ』（中央公論美術出版 1991）の「概説」においては、『営造法式』の「殿堂」と「庁堂」を次のような解釈をしている。「殿堂では身舎・庇の柱高は同じで裳階つきとする。庁堂は身舎柱が庇柱より垂木勾配分高く、裳階はない。」とし、「わが国の古代仏堂では「殿堂」形式またはこれに近いものは法隆寺金堂と興福寺東金堂のみで、他はすべて「庁堂」形式となっている。」とする。東大寺金堂や唐招提寺金堂などは側柱と入側柱の高さが異なるので、庁堂形式になる。つまり、わが国において殿堂形式は例外的存在で、金堂などの中心建物においても庁堂形式が一般的だったとする。

## 各部位の構造

平安以前の建築遺構のうち、仏堂と塔婆について、それぞれの建築の構造的特性を見出すために、床、柱、身舎柱上部材、長押、組物形式、組物位置、天井等の項目ごとに考察する（表1参照）。

**床**　仏堂、塔婆とも奈良時代以前においては中国式の土間が一般的だが、平安時代になると板床が一般的となる。室生寺五重塔、当麻寺東塔、醍醐寺五重塔では縁は廻らないが内部を転根太の床とする。

**柱　高**　仏堂において、法隆寺金堂のみ身舎と庇の柱の高さが同じで、他は身舎柱の方が高い。

塔婆は両柱の高さが同じである。平安時代に入ると当麻寺西塔（奈良県）や一乗寺三重塔（兵庫県）では身舎柱上の大斗・枠肘木を省略し、柱が上の通肘木を直接うける。12世紀になると浄瑠璃寺三重塔（京都府）のように身舎柱を省略するものも現れる。

**身舎柱上の部材**　奈良時代、平安時代前期の仏堂においては斗・肘木組がのる。天永3年（1112）の鶴林寺太子堂を初見とし、室内に小組格天井が張られるようになると柱は天井上にのび、組物をのせない建物が出てくる。

塔婆においては基本的に斗・肘木組がのるが、先述のように当麻寺西塔、一乗寺三重塔では大斗・枠肘木が省略され、柱が上の通肘木までのびる。

**長　押**　法隆寺金堂・五重塔、法起寺三重塔以外の建物は長押が打たれる。

奈良時代から平安時代前期において長押は建具をつり込むための造作材として用いられた。

11世紀頃からは、建物の全面に打たれるようになる。断面が幅広のものから縦長

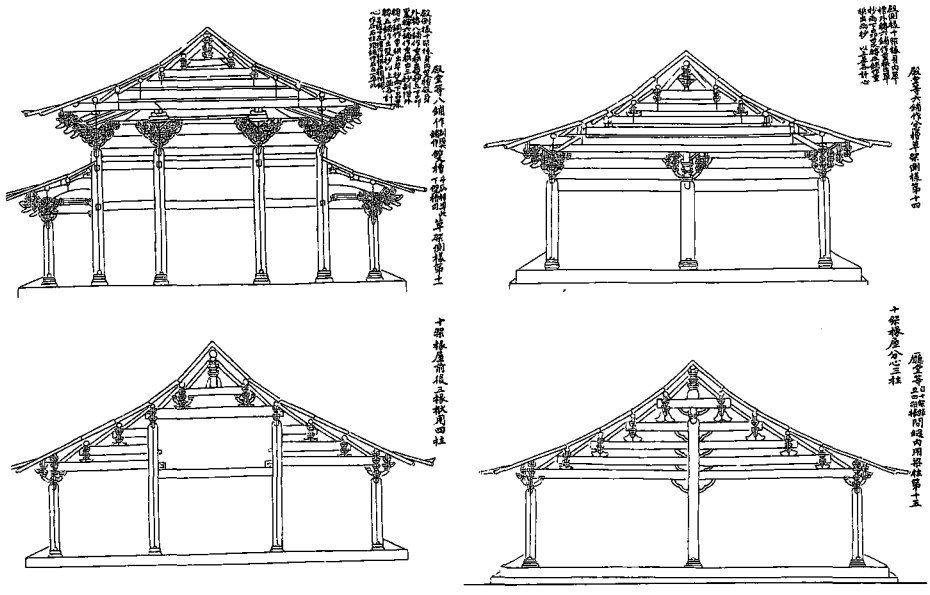

図1『営造法式』の「殿堂」（上）と「庁堂」（下）

**表1　古代建築の部位別構造形式一覧**

| 番号 | 県別 | 名　　称 | 建立年代 | | 床 | 柱 | 身舎柱上の部材 | 長押 | 組物形式 | 組物位置 | 身舎天井 | 庇天井 | 摘　　要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 奈良 | 法隆寺金堂 | 飛鳥 | | 土間 | 同高 | 組物 | なし | 雲形組物 | 小屋組下 | 組入天井 | 組入天井 | |
| 2 | 奈良 | 法隆寺東院夢殿 | 天平11 | 739 | 土間 | 高低 | 組物 | 建具位置（全面） | 三斗 | 母屋・桁下 | 化粧屋根裏 | 化粧屋根裏 | |
| 3 | 奈良 | 東大寺法華堂 | 天平19頃 | 747 | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 出組 | 母屋・桁下 | 組入天井 | 化粧屋根裏 | |
| 4 | 奈良 | 栄山寺八角堂 | 天平宝字 | | | 高低 | 組物 | 建具位置（全面） | 三斗 | 母屋・桁下 | 化粧屋根裏 | 化粧屋根裏 | |
| 5 | 奈良 | 新薬師寺本堂 | 奈良 | | 土間 | 高低 | 組物 | 建具位置 | 大斗肘木 | 母屋・桁下 | 化粧屋根裏 | 化粧屋根裏 | |
| 6 | 奈良 | 唐招提寺金堂 | 奈良 | | 土間 | 高低 | 組物 | 建具位置（全面） | 三手先 | 小屋組下 | 組入天井 | 組入天井 | |
| 7 | 奈良 | 唐招提寺講堂 | 奈良 | | 土間 | 高低 | 組物 | 建具位置 | 出三斗 | 母屋・桁下 | 化粧屋根裏 | 化粧屋根裏 | 長押、組物、天井は当初の形式 |
| 8 | 奈良 | 海竜王寺西金堂 | 奈良 | | 土間 | 高低 | 組物 | なし（後世） | 平三斗 | 母屋・桁下 | 化粧屋根裏 | 化粧屋根裏 | |
| 9 | 奈良 | 法隆寺東院伝法堂 | 奈良 | | 板床 | 高低 | 組物 | 正背面 | 大斗肘木 | 母屋・桁下 | 化粧屋根裏 | 化粧屋根裏 | |
| 10 | 奈良 | 法隆寺食堂 | 奈良 | | 土間 | 高低 | 組物 | 建具位置 | 大斗肘木 | 母屋・桁下 | 化粧屋根裏 | 化粧屋根裏 | |
| 11 | 奈良 | 室生寺金堂 | 平安前期 | | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 大斗肘木 | 母屋・桁下 | 組入天井 | 化粧屋根裏 | |
| 12 | 奈良 | 法隆寺大講堂 | 正暦01 | 990 | 土間 | 高低 | 組物 | 建具位置 | 平三斗 | 母屋・桁下 | 組入天井 | 化粧屋根裏 | |
| 13 | 京都 | 平等院鳳凰堂中堂 | 天喜01 | 1053 | 板床 | ― | ― | 全面 | 三手先 | 小屋組下 | 組入天井 | | |
| 14 | 滋賀 | 石山寺本堂 | 永長01 | 1096 | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 平三斗 | 母屋・桁下 | 組入天井 | 化粧屋根裏 | |
| 15 | 兵庫 | 鶴林寺太子堂 | 天永03 | 1112 | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 大斗肘木 | 母屋・桁下 | 小組格天井 | 小組格天井 | |
| 16 | 京都 | 醍醐寺薬師堂 | 保安02 | 1121 | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 平三斗 | 母屋・桁下 | 組入天井 | 化粧屋根裏 | |
| 17 | 岩手 | 中尊寺金色堂 | 天治01 | 1124 | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 平三斗 | 母屋・桁下 | 小組格天井 | 化粧屋根裏 | |
| 18 | 京都 | 往生極楽院阿弥陀堂 | 久安04 | 1148 | 板床 | 高低 | 母屋桁 | 全面 | 舟肘木 | 母屋・桁下 | 舟底天井 | 化粧屋根裏 | |
| 19 | 高知 | 豊楽寺薬師堂 | 仁平01頃 | 1151 | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 舟肘木 | 母屋・桁下 | 棹縁天井 | 化粧屋根裏 | 身舎柱上の組物は隅のみ舟肘木 |
| 20 | 福島 | 阿弥陀堂(白水阿弥陀堂) | 永暦01 | 1160 | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 出組 | 母屋・桁下 | 小組格天井 | 小組格天井 | |
| 21 | 奈良 | 當麻寺本堂(曼荼羅堂) | 永暦02 | 1161 | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 平三斗 | 母屋・桁下 | 化粧屋根裏 | 化粧屋根裏 | |
| 22 | 京都 | 広隆寺講堂 | 永万01 | 1185 | 土間 | 高低 | 組物 | なし（後世） | 出三斗 | 母屋・桁下 | 化粧屋根裏 | 化粧屋根裏 | |
| 23 | 宮城 | 高蔵寺阿弥陀堂 | 治承01 | 1177 | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 舟肘木 | 母屋・桁下 | 棹縁天井 | 化粧屋根裏 | |
| 24 | 京都 | 浄瑠璃寺本堂 | 治承02以前 | 1178 | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 舟肘木 | 母屋・桁下 | 化粧屋根裏 | 化粧屋根裏 | |
| 25 | 京都 | 醍醐寺金堂 | 平安後期 | | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 平三斗 | 母屋・桁下 | 小組格天井 | 化粧屋根裏 | 身舎天井は慶長移築時か |
| 26 | 兵庫 | 鶴林寺常行堂 | 平安後期 | | 板床 | 高低 | 組物 | 全面 | 大斗肘木 | 母屋・桁下 | 棹縁天井 | 格子天井 | |
| 28 | 山口 | 月輪寺薬師堂 | 平安後期 | | 板床 | 高低 | 組物 | 全面（後世） | 舟肘木 | 母屋・桁下 | 小組格天井 | 化粧屋根裏 | |
| 29 | 大分 | 富貴寺大堂 | 平安後期 | | 板床 | 高低 | 桁 | 全面 | 舟肘木 | 桁下 | 小組格天井 | 小組格天井 | |

塔婆建築

| 番号 | 県別 | 名　　称 | 建立年代 | | 床 | 柱 | 身舎柱上の部材 | 長押 | 組物 | 組物位置 | 庇天井 | 摘　　要 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 奈良 | 法隆寺五重塔 | 飛鳥 | | 土間 | 同高 | 組物 | なし | 雲形組物 | 小屋組下 | 組入天井 | |
| 2 | 奈良 | 法起寺三重塔 | 天武13～慶雲03 | 706 | 土間 | 同高 | 組物 | なし | 雲形組物 | 小屋組下 | 組入天井 | |
| 3 | 奈良 | 薬師寺東塔 | 天平02 | 730 | 土間 | 同高 | 組物 | 建具位置 | 三手先 | 小屋組下 | 組入天井 | |
| 4 | 奈良 | 海竜王寺五重小塔 | 天平年間 | | 土間 | ― | ― | 全面 | 三手先 | 小屋組下 | 組入天井 | 四天柱なし |
| 5 | 奈良 | 元興寺極楽坊五重小塔 | 奈良 | | 土間 | 同高 | 組物 | 全面 | 三手先 | 小屋組下 | 組入天井 | |
| 6 | 奈良 | 當麻寺東塔 | 奈良 | | 板床 | 同高 | 組物 | 全面 | 三手先 | 小屋組下 | 組入天井 | |
| 7 | 奈良 | 室生寺五重塔 | 奈良末～平安初 | | 板床 | 同高 | 組物 | 全面 | 三手先 | 小屋組下 | 組入天井 | |
| 8 | 奈良 | 當麻寺西塔 | 平安前期 | | 土間 | 高低 | 通肘木 | 全面 | 三手先 | 小屋組下 | 組入天井 | |
| 9 | 京都 | 醍醐寺五重塔 | 天暦06 | 952 | 板床 | 同高 | 組物 | 全面 | 三手先 | 小屋組下 | 組入天井 | |
| 10 | 京都 | 浄瑠璃寺三重塔 | 嘉承02 | 1107 | 板床 | ― | ― | 全面 | 三手先 | 小屋組下 | 小組格天井 | 四天柱なし　心柱２重以上 |
| 11 | 兵庫 | 一乗寺三重塔 | 承安01 | 1171 | 板床 | 高低 | 通肘木 | 全面 | 三手先 | 小屋組下 | 小組格天井 | 縁がまわる　心柱２重以上 |
| 12 | 奈良 | 旧富貴寺羅漢堂 | 平安後期 | | | ― | ― | 全面 | 二手先 | 小屋組下 | 組入天井 | 四天柱なし　心柱２重以上 |

となり、造作材から構造材に変身する。

**組物形式**　伽藍の中心建物である金堂、塔婆は三手先、他の堂は手先の出ない平三斗、大斗肘木などとする。平安時代も後半になると舟肘木の仏堂が多く見られるようになる。

**組物位置**　仏堂、塔婆とも三手先の建物は、柱と小屋組の間に斗・肘木組が入り、それぞれが通肘木等によって連結される。ほかの組物をもつ建物は柱が屋根面のすぐ下までのび、母屋・桁との間に斗・肘木が組まれる。正暦元年（990）の法隆寺大講堂を初見として野小屋が組まれ、この母屋・桁は化粧材となる。

模式図（図３）のように三手先組物をもつ建物では、組物は柱と小屋組の間に層状に配置され、他の組物は屋根面に沿ってピンポイント的に配される。

**天　井**　仏堂建築においては、天永３年（1112）の鶴林寺太子堂を境にそれ以降小組格天井のものが多く使われるようになる。材の断面寸法から見ても明らかなように構造的役割は希薄で、化粧材である。庇部分の化粧屋根裏の垂木材にしてもこの頃のものは野小屋をもち化粧的役割が強い。

鶴林寺太子堂以前の建築では、身舎・庇とも組入天井とするもの、身舎を組入天井、庇を化粧屋根裏とするもの、身舎・庇とも化粧屋根裏とする三種に大別できる。最初のタイプは三手先組物をもつ建物、次のものは出組の東大寺法華堂と法隆寺大講堂、最後のものは法隆寺東院伝法堂をはじめとする切妻造建物と八角円堂の法隆寺夢殿と栄山寺八角堂である。

組入天井は、三手先組物をもつ軒の深い建物では内部全面に使用されていること、断面が３寸を超える材を約１尺間隔で格子に組む仕事などから見ても構造材であることは明白である。軒下に軒天井を組むのも深い軒の構造強化のためである。

塔婆においては奈良・平安時代を通じて組入天井が基本である。しかし、平安時代後半になると浄瑠璃寺三重塔や一乗寺三重塔で小組格天井が張られるようになる。

**建物の組み上げ順**　図２に、軒が深く組入天井をもつ建

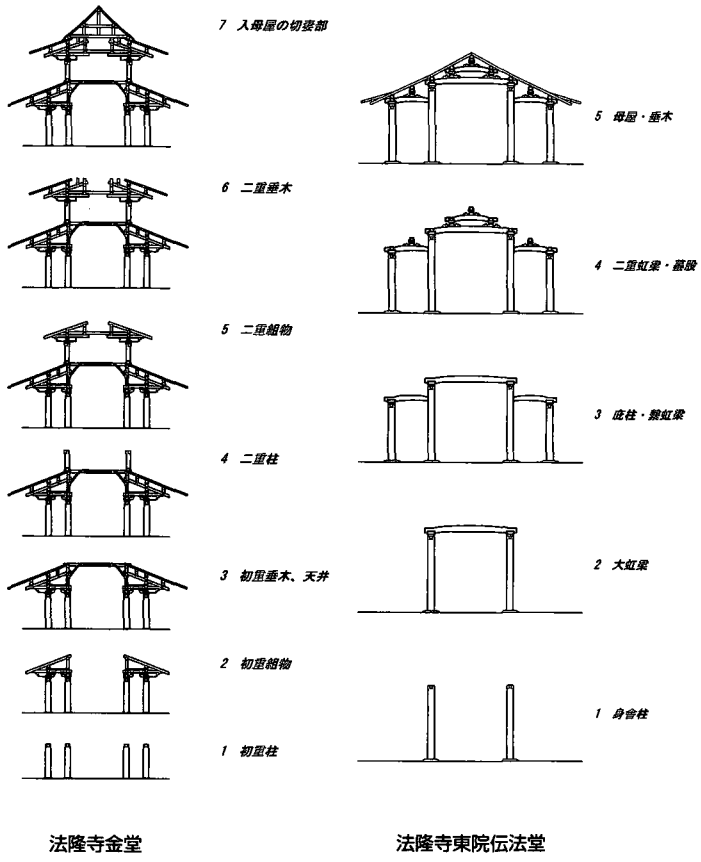


図2　建物組み立て順にみる構造形式の違い

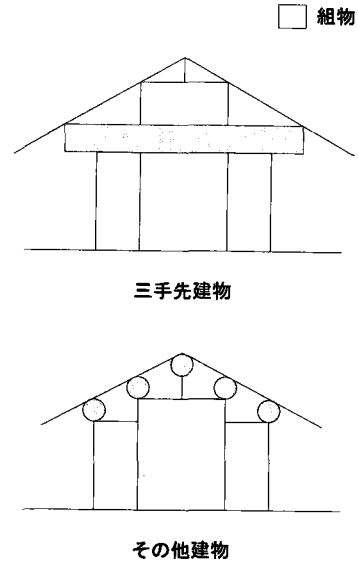


図3　三手先建物とその他建物の構造の違い

物として法隆寺金堂、手先を出さず全面化粧屋根裏とする建物として法隆寺東院伝法堂の組み上げ工程図を掲載した。

法隆寺金堂は身舎、庇柱を同時に立て、その上に組物を組み、次に身舎部に梁を掛け、身舎・庇ともに組物間に格子天井を組み込む。

法隆寺東院伝法堂はまず身舎柱を立て、次に虹梁を架け、身舎部分を固める。次に庇柱を立て、繋梁を架ける。

以上のように法隆寺金堂と法隆寺東院伝法堂は、構造形式のまったく異なるタイプである。間面記法を用いて建物の構造形式を表現することがあるが、この記法が使用できるのは法隆寺東院伝法堂のように後から庇を付加する構造の建物であり、法隆寺金堂のような建物には意味がない。

身舎を組入天井、庇を化粧屋根裏とする天井の分類で中間的な位置づけの東大寺法華堂、法隆寺大講堂は組み上げ工程で分類すると法隆寺東院伝法堂タイプである。

塔婆建築は法隆寺金堂と同じタイプである。

## 平安時代における構造の変化

平安時代に入り、板床が多く見られるようになるなど日本の作法に適合するつくりへと変化がみられるようになる。正暦元年（990）の法隆寺大講堂において野小屋が出現し、それから百年ほど後には室内と天井裏を遮蔽する化粧材である小組格天井が出現する。野小屋と小組格天井の出現は建築構造を語る上で極めて大きな意味を持っている。構造材と化粧材の二元的構成の建築というわが国独自の構造の誕生である。その後の桔木の出現など中世以降の大きな展開の準備が整う。

先述のように、長押が建具をつり込むための造作材から構造材に変化する。また、平安時代後期になると、当麻寺曼陀羅堂のように仏殿と拝堂の上に大屋根をかける建物の発生をみる。

## 奈良時代以前における殿堂形式と庁堂形式

平安時代に入り、日本化が進み、わが国独自の大きな展開をみせるが、それ以前の建築について考察し、『営造法式』の「殿堂」、「庁堂」との比較を試みる。

先の項で考察したことをまとめると、奈良以前の建築は、構造的に見て大きく二つのタイプに分類できる。ひとつは、三手先組物をもつ軒の深い建物で、構造的に成り立たせるために小屋組と柱の間に組物の層を設け、格子天井を組み入れるもの。いまひとつは手先を出さない、あるいは出組程度で軒出の少ない建物である。組入天井を内部全面に組み込むことは構造的に必要がない。

このように構造的側面からみると、若干のディテールの相違はあっても、前者が「殿堂」、後者が「庁堂」に相当するとみてよいであろう。『日本建築史基礎資料集成　仏堂Ⅰ』の「概説」において、三手先組物を有する唐招提寺金堂なども身舎柱と側柱の高さが相違することから、法隆寺東院伝法堂と同じ庁堂形式だとする。しかし、唐招提寺金堂と法隆寺東院伝法堂とでは構造的に相違することはこれまで述べたことから明らかであろう。

（村田健一／文化庁建造物課）